

新野左馬助

親地

井伊家を救った武将



新野左馬助親矩公は、御前崎市の北西部に位置する新野地区の領主でした。平成29年NHK大河ドラマ「おんな城主十文字」でも、今川の家臣でありながら井伊家の窮地には、井伊家の側に立ち事なきをはかろうとする誠実で優しい公が見られました。

太主今川と井伊家の間で

新野左馬助について井伊家伝記には「新野左馬助事は、遠州城東郡新野村三千石の地頭、今川義元の親族なり」と記されています。また、新野左馬助親矩の妹(名は不明)が井伊直盛の妻であった事により、太主である今川と井伊家との間で、関係を取り持つ役割を果たしていました。井伊直盛は、今川義元の軍勢に従い桶狭間の戦いで先陣をつとめ、義元とともに討死しました。

後を継いだ直親は、家老小野但馬の讒訴(ざんそ)により、氏真に疑われ討たれそうになりましたが、左馬助は進んで今川の居城のある駿府に向きその間違いを訴えました。氏真は一旦は許したものの、小野但馬の度重なる奸計(かんけい)から、再び直親の討ち手を掛川城主・朝比奈泰朝に命じてしまいました。直親は疑いを晴らすべく家臣二十騎を従え駿府に向かいますが、その道中、泰朝の領内・掛川でついに討たれてしまいました。

氏真はさらに当時2歳であった直親の幼子・虎松(後の直政)をも討たんとしましたが、左馬助の嘆願によりこれを許すに至りました。以後、虎松は左馬助の預かりとし、新野家

で引き取り養育されました。

井伊家再興への苦難の道

左馬助はその後、永禄7年9月に曳馬城を攻め、城の東安間橋にて討死にしまいました。

虎松は左馬助亡き後も左馬助の妻により、5才になるまで新野邸で養育されましたが、またも小野但馬の口添えにより、氏真は虎松を亡きものにしようと考えたのでした。

左馬助の妻は、虎松を井伊谷・龍潭寺の南溪和尚の許での保護を願いました。南溪和尚は虎松を僧とすることに、氏真に助命を嘆願し許しを得ました。

その後、虎松は南溪和尚の計らいで井伊谷を離れ、鳳来寺に身を寄せましたが、今川の没落により身の安全がかわかると、母の嫁ぎ先である浜松の松下源太郎清景の許で養子となり、松下の名を称しました。

しばらくして虎松は、家康に見出され徳川家に仕官し、家康本人の命により「井伊万千代」と名を改め、井伊家の再興を果たしました。万千代は戦の度に武功を表し、名を井伊直政と改め、徳川四天王の一人として江州彦根の城主となりました。

新野家再興と旧恩の地への思い

天保元年、井伊家14代井伊直亮の時、父直中の十男中守に新野左馬助の名跡を継がせ、井伊家の客家老とし厚遇しました。中守は新野左馬助親良として、井伊家の家老を勤め明治までその責を完うしました。

当時の新野屋敷の跡は現在も彦根城内に現存し、彦根に建てられた龍潭寺には、新野左馬助の供養塔が建立され、位牌とともに安置されています。

この新野左馬助親良は、井伊直弼の兄であり、新野村誌には新野左馬助の名跡を継いだ親良が、左馬助の墳墓調査のために新野村を訪れ、墳墓の確認を藩侯・井伊直弼に伝えたとされています。

当時、直弼は翌春に西上(西方への出張)を予定していたため、その途中の新野村で左馬助の墳墓に祖先の旧恩を謝す予定でしたが、万延元年3月3日江戸城桜田門外で暗殺され宿願を果たせずにその生



新野左馬助親矩公の墓所・左馬武神社

涯を終えました。

時の大老・井伊直弼が、その専断を憤る水戸浪士により命を落とさねば、恩義と忠節の地・新野に何らかの足跡を残したであろうという想像は難しくありません。

参考文献・浜岡町史／他

八幡平の城



舟ヶ谷の城山に対し、東側に位置した八幡平の城は、ほぼ南北に連なる一の曲輪(八幡平)と二の曲輪からなる連郭式の山城です。

舟ヶ谷の城山



新野の中心部に張り出した牧之原台地の先端部に位置し、新野左馬助公の居城と伝承され、現在は遊歩道が整備されています。

新野左馬助公展示館



新野左馬助公の生涯や長年にわたり地域医療と古城などの調査・研究に取り組んできた鈴木東洋氏(故人)を紹介しています。 ☎0537-86-3210

観光案内所 よってかまい



新野地区の観光案内、地場産品や左馬助公のグッズを販売する憩いのお店です。新野左馬助公展示館の駐車場にもご利用いただけます。 ☎0537-86-7517



新野左馬助親矩公をイメージした版画